

C-1

東京方言における心理動詞と主格属格交替現象について*

佐久間篤 (南山大学大学院)

atsushi.sakuma.linguistics@gmail.com

要旨

東京方言ではある種の従属節内で属格主語が可能な場合があり、主格属格交替現象と呼ばれている。Hiraiwa(2001)は名詞的な要素が節の主要部として現れない節(ND-NGC 節)においてもこの現象は起こるとした。これに対し、Maki & Uchibori(2008)は非顕在的な DP が存在するとしたが Takahashi(2010)は ND-NGC 節内には DP が節の主要部として存在しないとした。Miyagawa(2013)では D の他に weak v と相対テンスが主語に属格を与えるとした。本研究では、ND-NGC 節内で用いられる他動詞について検討し、「動作動詞」・「原因項が主語となる心理動詞」は属格主語と用いた場合は非文となるが、「経験者項が主語となる心理動詞」・「受身形」は属格主語と用いた場合であっても完全な非文とはならないと主張する。原因項を主語と取る心理動詞では vP 指定部に原因項が生成され、経験者項を主語と取る心理動詞では vP 指定部には何も生成されないことから、本発表では Miyagawa(2013)の weak v と相対テンスが主語に属格を与えるという主張を支持する。

1. はじめに

東京方言では従属節の中で、(1a)のように主語に「が」が付与されることも(1b)のように「の」が付与されることも可能である。この現象は Nominative-Genitive Conversion(NGC; Harada 1971)やが-の交替(井上 1976)、主格属格交替現象と呼ばれている(以下、主格属格交替現象とする)。

(1) a. boku ga yonda hon

b. boku no yonda hon

(Harada 1971:26)

主格属格交替現象は、(2a)のような関係節や(2b)のような空所なし関係節(NGC 節)において起こる他に、Hiraiwa(2001)は(3)のような名詞的な要素が節の主要部として現れない節(以下、ND-NGC 節)でも起こるとした。Hiraiwa(2001)に対して様々な議論がなされたが ND-NGC 節には D が存在するという証拠が無いため、Miyagawa(2013)では NGC 節の外側にある D が主語に属格を与える他、weak v (非対格自動詞のように外項を認可しない v)と相対テンスが主語に属格を与えるとした。

(2) a. Kinoo John ga/no katta hon

(Hiraiwa 2001:73)

b. John ga/no kuru kanousei

(Ochi 2001:247)

(3) John wa [ame ga/no yamu made] office ni ita

(Hiraiwa 2001:77)

また、いわゆる心理動詞について、Belletti&Rizzi (1988)(以下 B&R (1988))以降、心理動詞の項は動詞より低い位置で生成されるという主張が存在する。本発表では、①『「動作動詞」や「原因(Cause; 対象(Theme)と呼ばれる場合もある)を主語に経験者を目的語に取る心理動詞」を ND-NGC 節で用いた場合、属格主語は現れると非文になるが、「経験者を主語に感情の対象(Object of Emotion; 対象(Theme)と呼ばれる場合もある)を目的

* 本発表に関して、Doan Le Hoai Anh 氏、王冠亮氏、市川賢汰氏から内容や例文に関して様々な方向から有益なコメントを頂きました。この場で深く感謝を申し上げます。

2. ND-NGC 節と主語への属格の認可について

– 122 –

次に、weak v と相対テンスがある場合も属格主語が現れる場合がある。Hiraiwa (2001)は(8)のように名詞的な要素が主要部として現れない ND-NGC 節においても属格主語は現れるとし、必ずしも属格は D から与えられないとした。しかし、Maki & Uchibori (2008)は(8)には隠れた名詞的な主要部が存在し、それは(9)のように明示的に表すことが出来るとした。

- (8) a. John wa [ame ga/no yamu made] office ni ita.
 b. [Boku ga/no omou ni] John wa Mary ga suki-ni-tigainai
 c. [John ga/no kuru to konai to] de wa oochigai da. (Hiraiwa 2001:73)
 d. John wa [Mary ga/no yonda yori] takusan-no hon wo yonda (Watanabe 1996:396)
- (9) a. John-wa [ame-ga/no yamu toki/zikan made] ofisu-ni ita
 b. [Boku-ga/no omoo-no-ni], John-wa Mary-ga sukini tigainai.
 b. [John-ga/no kuru-no to konai-no to-dewa] ootigai da
 c. John-wa [Mary-ga/no yonda-teedo/no yori] takusan-no hon-o yonda (Maki & Uchibori 2008:203)

しかし、Takahashi (2010)は、(8)のような ND-NGC 節と(9)のような ND-NGC 節の主要部を明示的に表した節とでは属格主語の現れ方が異なるとした。「まで」を使った ND-NGC 節内では(10a)のように非能格動詞と属格主語は共起出来ないが、(10b)のように「まで」の前に名詞的な主要部「時」が現れる場合は非能格動詞と属格主語は共起出来る。また、(11)のように動詞が非対格動詞の場合、主要部を明示的に表しても表さなくても属格主語は現れる。Takahashi (2010)は ND-NGC 節に D は存在せず、また ND-NGC 節であっても非対格動詞の主語に属格が付与される事が出来るため、属格主語は D が与えない場合があるとした。

- (10) a. John-wa [oogoede Mary-ga/*no wara-u -made] odotteita.
 b. John-wa [oogoede Mary-ga/no wara-u toki -made] odotteita. Takahashi (2010:364)
- (11) a. John-wa [ame-ga/no yam-u made] office-ni ita
 b. John-wa [ame-ga/no yam-u toki-made] office-ni ita Takahashi (2010:365)

Miyagawa(2013)は D なし NGC 節に現れる時制は相対テンスであり、(12a)の「から」節のように絶対テンス(independent tense)が現れる節の場合は(12b,c)のように非対格動詞であっても属格主語は現れないとした。よって、Miyagawa(2013)は weak v と相対テンスがある場合にも属格主語が現れるとした。

- (12) a. Hanako-ga {kekkon-suru/*kekkon-sita } {kara/nara}, kanozyo-no kekkonsiki-ni de-tai.
 b. Hanako-ga/*-no kuru kara, uti-ni ite-kudasai
 c. Ame-ga/*-no futta kara, miti-ga nurete-iru (Miyagawa 2013:12)

3.心理動詞とその構造について

3.1. 心理動詞の特殊な振る舞いについて

他動詞には心理動詞があるが、振る舞いが他の動詞と異なる部分がある。例えば、(13a)のように「自分」はそれを構成素統御する先行詞となる主語が存在する場合に、「自分」はその先行詞「太郎」と同一指示解釈することが出来る。しかし、(13b)の「自分」は主語位置にあり「太郎」から構成素統御されていないため「自分」は太郎と同一指示解釈することが出来ない。

(13) a. 国立駅で、太郎_iが自分_iの友達を待った

b. *国立駅で、自分_iの友達が太郎_iを待った

しかし、原因を主語に取るような心理動詞の場合、自分の解釈の振る舞いが他の動詞と異なる。例えば、

(14)では「自分」は、経験者項の目的語の「太郎」から構成素統御されていないが「自分」は「太郎」と同一指示解釈することが出来る。また、(15)のように「自分」は原因項主語と同一指示することも出来る。

(14) a. 自分_iの母親の死が太郎_iを悲しませた

b. 自分_iの背が低いことが太郎_iを悩ませた (三宅 2011:106)

(15) a. 太郎_iが自分_iの妹を悲しませた

b. 太郎_iが自分_iの友達を悩ませた

ただし、心理動詞であれば振る舞いが同じであるとは限らず(16)のように経験者項を主語に取るような心理動詞の場合、(16a)のように「自分」は経験者項主語と同一指示が出来るが、(16b)のように経験者項主語に「自分」がある場合「自分」は感情の対象「太郎」と同一指示が出来ない。

(16) a. 太郎_iが自分_iの母親を愛している

b. *自分_iの母親が太郎_iを愛している (三宅 2011:106)

3.2. B&R (1988)

これらの違いについて B&R(1988)は構造的な面から説明した。まず、B&R(1988)は(17)のように心理動詞には3種類あるとした。

(17) a. Class I: Nominative experiencer, accusative theme.

John loves Mary.

b. Class II: Nominative theme, accusative experiencer.

The show amused Bill.

c. Class III: Nominative theme, dative experiencer.

The idea appealed to Julie.

(Landau 2010:4-5)

B&R(1988)は心理動詞については(18)のような構造をD構造で持つとし、対象項(原因項)を主語に取るような心理動詞の場合、B&R(1988)は対象項が(18b)のように主語位置に移動するとした。また、B&R(1988)は経験者項を主語に取るような心理動詞では(18c)のように経験者項が主語位置に移動するとした。

(18) a. [s [VP [V' V NP_{THEME}] NP_{EXPERIENCER}] (B&R1988:335 を基に作成)

b. [s NP_{THEMEi} [VP [V' V t_i] NP_{EXPERIENCER}]

c. [s NP_{EXPERIENCERi} [VP [V' V NP_{THEME}] t_i]

しかし、主語位置にある「自分」が目的語位置にあるものと同一指示出来るという現象は心理動詞以外にも、統語的な使役や比喩的な二重目的語構文でも成り立つことが分かっている(cf. Campbell&Martin (1989), Fujita (1993))。例えば、(19a)は「悩ませる」という原因項主語が現れる心理動詞を統語的に使役化した構文であるが「自分」は目的語位置にある「Yamada-sensei」と同一指示する事が出来る。(19b)は非能格動詞を統語的に使役化した構文であるが、「自分」は目的語位置に現れる「Yoshiko」と同一指示することが出来る。

(19) a. Zibun_i no furyoo-gakusei ga Yamada-sensei_i o (*wazato) nayamase-ta

b. Zibun_i no kodomo ga Yoshiko_i o (*wazato) warawase-ta. (Fujita 1993:382)

統語的な使役や比喩的な二重目的語構文で現れる動作動詞と心理動詞は、主語位置に原因、目的語に経験者が現れるため構造が共通している可能性がある。しかし、B&R (1988)の説明が正しいとすると対象(原因)項は動詞より低い位置に基底生成されるため、「自分」が目的語位置の要素と同一指示が可能であるという一つの事実に対し様々な理由を考える必要がある。また、動作動詞が使役化した場合と使役化が起らなかった場合で項の生成位置も変わるという説明をする必要も発生する。

3.3. Landau (2010)

3.2.で示されたような議論を基に Pesetsky(1995)や Landau(2010)は、経験者項が目的語に現れる心理動詞は原因項が主語に経験者項が目的語に生成されると主張した。Landau(2010)は(18b)のような原因が主語に現れる場合は(20a)のような構造を、原因が主語に経験者が与格で現れる場合は(20b)のような構造を取るとした。よって、Landau(2010)が正しいとすると原因項主語に取る心理動詞は動作動詞と同じ構造を取る。

(20) a. [_{VP} DP_{CAUSER} [_{v'} V [_{VP} V [_{PP} Ø DP_{EXPERIENCER}]]]]]

b. [_{VP} [_{PP} P_{DAT} DP_{EXPERIENCER}] [_{v'} V DP_{T/SM}]] (Landau 2010:8)

4. ND-NGC 節内の心理動詞と属格主語について

4.1. ND-NGC 節内の心理動詞の振る舞いの予想について

B&R (1988)と Landau(2010)が正しいとすると、原因項を主語に取り経験者を目的語に取るような心理動詞の場合には原因項は vP の指定部に生成され、経験者項を主語に感情の対象を目的語に取るような心理動詞の場合には vP の指定部には何も生成されない。つまり、前者は strong v が存在し、後者は weak v が存在すると仮定出来る。よって Miyagawa (2013)の議論が正しいならば前者は ND-NGC 節で属格主語と現れる事が出来ず、後者は ND-NGC 節で属格主語と現れる事が出来る。

4.2. 日本語の心理動詞

日本語において原因項を主語に取る心理動詞は(21a)、経験者項を主語に取る心理動詞は(21b)である。

(21) 怒らす、とまどわす、じらす、いらつかす、あがらす、飽きらす¹

(22) 憎む、羨む、妬む、恨む、懐かしむ、嫌う、好く、好む、望む、悔いる、楽しむ、後悔する、恐れる、嘆く (板東・松村 2001:77 より「漢語+する」の動詞を除外し作成)

4.3. ND-NGC 節内の心理動詞と属格主語について

ND-NGC 節において動詞を入れた場合、どのような動詞で属格主語が認可出来るか考える。(23)は動作動詞を用いたもの、(24)は原因項を主語として持つ心理動詞を用いたもの、(25)は経験者項を主語として持つ心理動詞を用いたもの、(26)は受身を用いたものである。

¹ 原因を主語に取り経験者を目的語に取る心理動詞について、板東・松村(2001)には英語に対応する形として日本語では自動詞の形でのみ掲載されているため、本発表ではそれに対応する他動詞形を示した。また、「漢語+させる」の形の心理動詞は除外した。

- (23) a. 状況: ビデオデッキが壊れている状況を説明する時
 実は、太郎{が/*の}壊すまで、暴力的な映像が流され続けたんだよ
- b. 状況: 花子は良い意見を出す。ある人が計画書を書いてそれを花子に見せるか迷っている。
 花子{が/*の}読むと読まないのでは、結果は大違いになると思うよ
- c. 状況: 学生と教員がモグラ叩きをしてその結果をその場に居ない人に報告している
 全体的に、学生{が/*の}叩くより、教員がよりモグラを叩いた
- (24) a. 状況: 太郎が怒っている理由を説明する時
 実は、太郎{が/*の}怒らすまで、花子はその様子を録音し続けたんだよ
- b. 状況: 花子はよく人を苛つかす。花子が重要な会議に参加して、その会議の結果を予想している。
 花子{が/*の}苛つかすと苛つかさないとでは、結果は大違いになると思うよ
- c. 状況: 学生と教員が事務からのメールを返信しなく焦らせということで問題になっている
 全体的に、学生{が/*の}焦らすより、教員がより事務員を焦らせた
- (25) a. 状況: 太郎がある大統領を憎んでいる理由を説明する時
 実は、太郎{が/?の}憎むまで、その大統領に対するデマは流され続けたんだよ
- b. 状況: 花子は地域の有力者である。便宜を図ってもらうために花子をもてなす予定である。
 花子{が/?の}楽しむと楽しまないのでは、結果は大違いになると思うよ
- c. 状況: 大学である事件が起き、学生も教員もその事件の犯人を嫌っている
 全体的に、学生{が/?の}嫌うより、教員がよりその学内の事件の犯人を嫌ったんですよ
- (26) a. 状況: ある事件の様子が流されているが、途中でその映像は途切れた
 実は、隠しカメラ{が/?の}壊されるまで録画は続いたんだよ
- b. 状況: ある事件のための隠しカメラをどこに設置するか相談している
 隠しカメラ{が/?の}見られると見られないのでは、結果は大違いになると思うよ
- c. 状況: 上司のセクハラの証拠を確保するためにある団体に相談して、その返事
 全体的に、隠しカメラ{が/?の}使われるより、盗聴器がより使われたんですよ

(23)-(26)から ND-NGC 節で主格の「が」を用いた場合はすべての文が容認出来る。しかし、(23)のように動作動詞と(24)のように原因項が主語の心理動詞の場合、属格主語が現れると非文となる。しかし(25)のように経験者項が主語の心理動詞と(26)のように受身の場合では、属格主語が現れたとしても容認度は下がるが完全な非文とならない。よって、原因の意味役割を持つ主語を持つ心理動詞は ND-NGC 節に現れる事が出来ないが経験者の意味役割を持つ主語を持つ心理動詞は ND-NGC 節に現れる事が出来ないわけではなく、その理由として前者は vP の指定部に原因が生成されて後者は vP の指定部には何も生成されないためであると言える。よって、ND-NGC 節内で strong v の場合は属格主語が認可されず weak v の場合は属格主語が完全に認可出来るため、Miyagawa (2013)の議論は正しいという可能性が高い。

5.おわりに

本発表では①『「動作動詞や原因を主語に経験者を目的語に取る心理動詞を ND-NGC 節で用いた場合、属

格主語は現れると非文になる」が、「経験者を主語に感情の対象を目的語に取る心理動詞や受身文を ND-NGC 節で用いた場合、属格主語が現れても完全に非文にならない』と②『Miyagawa(2013)の weak v と相対テンズが主語に属格を与える』を(23)-(26)の例文から示した。

しかし、(23)-(26)の文法性の違いには別の説明が可能である。(23)-(25)はすべて他動詞であるため目的語が必要な動詞である。(23)-(25)では目的語があると属格主語が認可されないという現象があるため、文脈を提示し目的語を省略出来るような形にした上で示した。しかし、目的語を省略しただけでは文法性が変化すると言い切る事が出来ない。また、省略した目的語を例文の意味解釈の時に補えないことで容認度判断に問題が生じる可能性もある。よって、(23)-(25)の容認度が完全でないという理由は目的語を省略したことに原因がある可能性がある。今後はこの目的語の問題をどのように排除出来るかを考えた上で、ND-NGC 節でどのような動詞が使用出来るかを再度考える必要がある。

参考文献

- 板東美智子・松村宏美(2001)「心理動詞と心理形容詞」影山太郎(編)『日英対照 動詞の意味と構文』東京:大修館書店。/ Belletti, Adriana & Rizzi, Luigi (1988) Psych-Verbs and θ -Theory. *Natural Language & Linguistic Theory* 6(3), 291-352. / Campbell, Richard & Martin, Jack (1989) Sensation predicates and the syntax of stativity. In *Proceedings of the English West Coast Conference on Formal Linguistics*, 44-55. Stanford Linguistics Association, Stanford University, Stanford, Calif. / Fujita, Koji (1993) Object movement and binding at LF. *Linguistic Inquiry* 24(2), 381-388. / Hale, Ken (2002) On the Dagur object relative: some comparative notes. *Journal of East Asian Linguistics* 11, 109-122. / Harada, Shin-Ichi (1971) Ga-No Conversion and Idiolectal Variations in Japanese. *Gengo Kenkyu* 60: 25-38. / Hiraiwa Ken (2001) On nominative-genitive conversion. In Guerzoni Elena & Matushansky Ora (eds.), *MITWPL* 39, 66-125. Cambridge, MA: MIT Press. / 井上和子 (1976)『変形文法と日本語』東京:大修館。/ Kornfilt, Jaklin (2008) Subject case and Agr in two types of Turkic RCs. In: Ulutas, S., Boeckx, C. (Eds.), *Proceedings of Workshop on Altaic Formal Linguistics(WAFL4)* *MITWPL* 56, 145-169. Cambridge, MA, The MIT Press. / Landau, Idan (2010) *The Locative Syntax of Experiencers*. Cambridge, MA: MIT Press. / Maki, Hideki & Uchibori, Asako (2008) Ga/No Conversion. In Miyagawa Shigeru & Saito Mamoru (eds.), *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, 192-216. Oxford: Oxford University Press. / 三宅知宏(2011)『日本語研究のインターフェイス』東京:くろしお出版。/ Miyagawa, Shigeru (1993) Case-checking and Minimal Link Condition. In: Phillips Colin (ed.) *MITWPL 19: Papers on Case and agreement II*, 213-254. Cambridge, Mass.: MIT Working Papers in Linguistics. / Miyagwa, Shigeru (2011) Genitive subjects in Altaic and specification of phase. *Lingua* 121, 1265-1282. / Miyagwa, Shigeru (2013) Strong Uniformity and Ga/No Conversion. *English Linguistics* 30, 1-24. / Ochi, Masao (2001) Move F and Ga/No Conversion in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 10, 247-286. / Pesetsky, David (1995) *Zero Syntax*. Cambridge: The MIT Press. / Takahashi, Hisako (2010) Adverbial clauses and nominative-genitive conversion in Japanese. *MIT Working Papers in Linguistics* 61, 357-371. Cambridge, MA: MIT Press. / Watanabe, Akira (1999) Nominative-genitive conversion and agreement in Japanese: a cross-linguistic perspective. *Journal of East Asian Linguistics* 5, 373-410.